

第5回「『論語』を読む楽しさ（一）」

古典を読む。

「四書五経」

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第5回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

『論語』を読む楽しさと題して、二回にわたってお話しします。その第一回です。

『論語』を読むというと、途端に、とても難しいことのように、感じてしまう方も多いかと思
います。しかし、大事なことは、『論語』をどう読むか、何のために読むかということです。

『論語』を読む、ということは、古典を読む、ということです。

【世界のベストセラー本】

一方、世界を見てみますと、やはりベストセラーがあります。

キリスト教文化圏では、これは古典というよりも教義書『新約聖書』。ユダヤ教は『旧約聖書』、
イスラム教の人ならば『コーラン』。

これらに対して東北アジアでは『論語』。これが常識でしょう。

『旧約聖書』、『コーラン』は信者に限定されている気がします。『新約聖書』は信者以外にも
読む人は多くおります。

広がりという意味では、『新約聖書』と『論語』とは抜きん出ています。分けても東北アジア
では『論語』は広く深く行き渡っています。

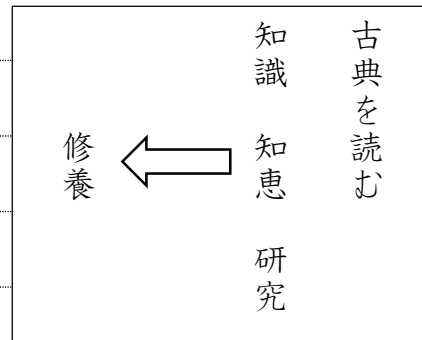
面白いことに、仏教では、そういうことはありません。

仏教徒は多いのですが、仏教として共通するものがない。いろいろな宗派があり、それぞれが
経典を持っています。それも一つだけでなく、多くの経典があります。仏教では、誰もが共通
で読んでいるものが意外とありません。

その点、儒教において『論語』は必ず皆に読まれてきました。そういう意味で古典中の古典と
言えると思います。

私が中国学を専門にしているから、『論語』を褒めているわけではありません。事実をお話しし
ています。

さて、それではこの古典をどういう風に読んできたと言いますと、大体三つの型があると思います。



「研究する」

まず一つは、研究的に読む。

これは一般の皆さんには関係ありません。研究者達が、あるいは『論語』を特別に何らかの形で学ぼうとする人の読み方です。もちろん研究者達が研究を還元してくることはあります。

研究には約束事がたくさんあります。それを全部整えるということは、専門に研究する人しかできませんので、ここでは必要ないと思います。

「修養とする」

二つ目は修養書として読む。

他の人は関係なく、自分が自分を鍛えるという気持ちで、「道徳」に接する。これが修養です。

『論語』を読んで、自分を鍛えていくということです。

「道徳」には、広い意味で三つの立場があります。その一つ、「絶対的道徳」はゆるぎないものです。幼い時にしっかりと教える必要があります。

ここで、道徳の分野についてお話しします。

道徳には、広い意味で三つの立場、「絶対的道徳」「相対的道徳」「修養」があります。

【道徳の分野】

「絶対的道徳」

人のものを盗まない。人を傷つけない。火を付けたりしない。これは「絶対的道徳」と言います。

これは古今東西、誰も否定できないものです。

問題は絶対的に対する「相対的道徳」です。

「相対的道徳」(モラルジレンマ)

考えようによって、変わる道徳です。例えば、三人が乗る船があったとします。その船は小さく、

三人も乗せることはできない。一人しか乗ることができない。さて、この三人はどうするか。

それが問題です。これは「モラルジレンマ」というものです。何が正しいのかは立場によって

変わります。

三人はまず相談するでしょう。

三人乗って、沈めば、いっしょに死のうと、合意することがありえますね。しかし、いや、誰か

一人が生き残ればいいとして、二人が海に飛び込まねばならないという結論も考えられます。

その二人をどう選ぶのか、難しいですね。

様々な結論が考えられますが、誰がどのように決めるか、そのときのそれぞれの価値判断に

よって決まる。大変難しいことです。これを「相対的道徳」と言います。

特に今日では、この「相対的道徳」が中心になっていくでしょう。

「修養」

これは、大人になってから自ら考えていくものでしょう。

それでは、古典を読む立場三つ目をお話しします。それは、知識として読むという立場です。

「知識を得る」

知識として読むことは学校教育に表れています。学校教育に『論語』が取り上げられていることは知識として読むということです。

手始めに『論語』を読む。その後は、その人の考え次第、人生の在り方次第ということになるでしょう。

皆さんの場合は、古典として読みます。

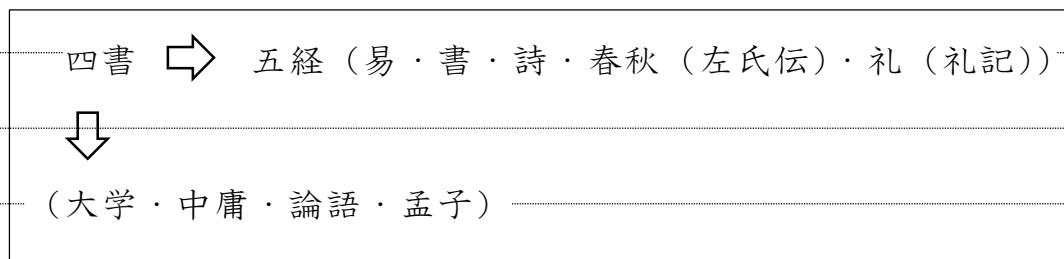
まずは「知識」として集積しながら、できれば「修養」という意味合いを忘れないでください。

次に、読む古典は『論語』だけで良いのかという問題。そんなことはありません。

優れたものがたくさんあります。我が国の長い歴史の中で、伝えられてきたものがありますので、それを少しお話しします。

奈良朝以来、ずっと儒教関係のものを読んできました。その中で平安時代の末ぐらいになると、整備されてきて、まずこの範囲を読めばよろしいというものが形になっていきます。

それが「^{ししよごきょう}四書五経」と言われるものです。



【四書五経】

それまでは決まりがなく、それぞれが、それぞれに読んでいました。

しかし、中国では宋代のころ、大事なことは、この「四書五経」とされ、それが中心になっていきます。

「五経」は本格派です。まず普通の人には時間的にも大変です。

ですから、「四書」について簡単に説明します。

よく、昔の人は「四書五経」を読んだと、世間ではいいます。それはうそですよ。「五経」を読むなどできません。専門家でも大変なことですから、一般の方ではあり得ません。

しかし「四書」、これを読み切った人はいる可能性が高いです。

江戸時代は「四書」が普通でした

では、「四書」とは何か。

まず『大学』、二番目が『中庸』。これは『礼記』という本の中の二篇『大学篇』『中庸篇』を抜き、前に据えたわけです。非常に重要なことが書かれているので、抜き出されたのでしょう。

そして『論語』、それから『孟子』があります。

『大学』『中庸』『論語』『孟子』。一文字ずつ取りまして、「学庸論孟」といいます。



孔子

出典：東京国立博物館



孟子

出典：東京国立博物館

こういった古典は**故事成語**の宝庫です。

この「四書」から、日本人がよく使うことば、例に引かれるものを挙げてみました。故事成語はいろいろなところがありますが、儒教には故事成語と言われることばが特に多くあります。

【故事成語】

『大学』より。

しょうじんかんきょ ふぜん な
「小人閑居して不善を為す」

閑居とは、時間ができたら、暇があったらという意味です。小人についてはいずれ説明しますが、ここではつまらない人としておきます。つまらない人は時間があると、暇があると、良いことしない、良くないことをするという意味です。「不善を為す」。暇だと悪いことをする。そういうことを見事に言っています。これが『大学』であります。

「小人閑居して不善を為す」。その通りと思います。時間があれば、良いことをするなどとは限らない。

次に『中庸』からです。

まこと てん みち これ まこと ひと みち
「誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり」

これは日本人の好きなことばの一つです。

「誠」、真心。日本人が好きなことばです。「誠」は、さきほどの「絶対的徳」に近い。真心を尽くすということです。天の道は、天が決めたルール、つまり真理。つまり「誠」は天のつくった法則である。

ところが、『中庸』はこう続けています。

「これを誠にするには」。「これ」は目的語ですけれども、事実上は形式目的語のようなものです。

「誠というものを実践するには」という意味。誠を実践するのは人の道である。人間がそれを行ふのだということです。モラルというのは、人間が実践してはじめて生きるものです。

ただ並べているだけではだめですね。それを教えています。

『中庸』の、このことばは有名なことばであります。

『孟子』(公孫丑^{こうそんちゆう}篇)から取りました。

「四十^{しじゅう}にして心^{こころ}を動かさず^{うご}」。

「心を動かさず」は、否定形の「不」をつけ、「不動」。「不動」はお不動さんの不動。動かない。

そして「心」ですから、「不動心」、「不動の心」として伝えられてきました。

「四十にして心を動かさず」。

『論語』にこんなことばがあります。

「四十^{しじゅう}にして惑^{まど}わず」これに近い。四十にして、心はもう動かない。40歳というのは、人間の一生において重要な時間であることを言った有名なことばです。このことばを知ると、40歳前後の方は大抵ショックを受けます。私はまだまだ迷っていますとおっしゃいます。

私はいつもこう説明します。

平均寿命が違います。孔子が生きていた頃の平均寿命は30歳です。

ですから、当時40歳と言え、もう高齢です。今の60歳ぐらいと考えていいのではないのでしょうか。60歳までは、我々は心は動きます。

そのように生きていく方が、気持ちが楽になります。

といった具合に、『論語』を読んでいただきたいと、私は思います。

今日『論語』を読む場合に、『論語』ができたその時代のその通りに読む必要はありません。

そのことばが、今日においてどういう意味があるか、個人個人の経験において、心の在り方はどうであったか、どうあるべきかを読んでいけばいいのではないのでしょうか。

今回は『論語』を読む楽しさの第一回をお話ししました。